論　文

メディア・リテラシーと開発教育の観点を取り入れたイギリスの時事問題学習

── 開発教育プロジェクト「グローバル・エクスプレス」を事例として ──

藤　原　孝　章

現代社会学部・現代こども学科

Abstract

"*Global Express* aims to enable young people to gain a greater understanding of the context in which news stories from the developing world happen and to build links between their experience of life and their understanding of development issues."(Global Express site, http://www.dep.org.uk/globalexpress/)

The contents of this research consist of three parts: (1) identifying what is the *Global Express*, (2) anlysing what a kind of topics it has and what is standards of decision-making for *Global Express* topics among every edition from 1st to 42nd, and, (3) examining the possibility of critical thinking based Current Issues Studies through the case study of the 34th edition of *Global Express* about Iraq War 2002.

はじめに－「判断・批判」を中心とする時事問題学習

本稿は、時事問題学習の単元開発を研究課題にしている。この課題に取り組む際に、筆者は、「時事問題」が教科として存在していた日本の戦後の初期社会科や英国で試みられているシティズンシップ教育から、「社会との関わり」を重視する社会科が求められているとして、民主主義の社会形成原理と関連した社会科の４つに学習原理を明らかにし、それらと関連づけた時事問題学習が望ましいとした。

その4つとは、①民主主義の科学的認識に関連して、事実的な知識や一般的・概念的知識をもとに、社会事象の科学的説明（科学的な社会認識）を中心とする学習原理、②民主主義の市民的価値に関連して、社会事象の科学的説明を踏まえた社会事象に対する価値的判断を中心とする学習原理、③民主主義の議論と批判による社会形成原理と関連して、社会事象、特に論争的な社会問題について合理的意思決定を中心とする学習原理、④民主主義の参加の社会形成原理と関連して、社会問題の問題解決の一環として、社会参加を中心とする学習原理である[1]。

時事問題学習は、特に国際政治や環境、開発、平和などの地球的な課題を取り上げる場合、課題の性格から、教師による解説におわることが多い。また、論争になっていて評価が定まらない、現在進行中の問題でもあることから、教師自身もどう取り上げていいわからないので、メディアの記事などに依存し、その言説を「受け売り」することも多い。

本稿は、このような教授上の困難さをかかえた時事問題学習に対して、イギリスのNGOが教師を支援する目的で発行している「グローバル・エクスプレス」（Global Express）というニュース教材冊子について取り上げ、「解説・説明」中心ではなく「判断・批判」を中心とする時事問題学習の可能性を探っていくものである。

本稿の構成は大きく３部に分かれている。まず、①「グローバル・エクスプレス」と何か、その目的やねらい、意義について紹介し、次に、②現在42号に達する「グローバル・エクスプレス」の各号が取り上げてきたトピック（時事問題）について分析し、その選択基準について考察する。最後に、③「グローバル・エクスプレス」の事例研究として「イラク戦争」を扱った授業を構想し、「判断・批判」を中心とする時事問題学習の可能性と課題について指摘しようと思う。

Current Issues Studies Introduced in Media Literacy and Development Education in the U.K.: A Case Study of the "Global Express" as the Development Education Project

1.「グローバル・エクスプレス」とは何か

「グローバル・エクスプレス」とは、イギリスのマンチェスター開発教育センターというNGOが、政府・国際開発省（DFID）とEUから資金を得て、始めたプロジェクトである。「時事問題を学校の教室に」というモチーフのもと、世界規模の問題がテレビやニュースの見出しに踊り、生徒たちがその問題に興味や関心を持ったその時に、イギリスの8-14才の子どもたち（ＫＳ2＆３）を教える教員の手元に届けられる開発教育用教材冊子である[2]。世界性と速報性を備えた時事問題学習にふさわしい教材である。

「グローバル・エクスプレス」が発行された背景は、いくつか指摘されている[3]。

一つは、Eメールやインターネットのような新しい情報技術の普及である。「グローバル・エクスプレス」の公式サイトに入れば、冊子や教材の内容がダウンロードできる[4]。また編集者自身も、オランダ、スペイン、イタリア、アイルランドなどヨーロッパの諸団体の協力やネットワークを生かし、速報性を確保している。二つ目は、イギリスにおける1988年以後の教育改革であり、それにともなう教員の仕事量の増加である。要するに教員は多忙になったので、支援を必要としている。三つ目は、2002年から、ナショナル・カリキュラムに、新教科「シティズンシップ」（市民科）が導入されたことである。そこでは、開発教育の視点やメディア・リテラシーの学習が取り入れられている[5]。

しかしもっとも重要な背景は四つ目のものである。それは、マス・メディアの圧倒的かつ一方的な情報に対する批判的な取り組みである。メディアの報道に影響されて、子どもたちは、たとえば「アフリカといえば貧困」「北の援助を待つ南の国」というイメージをもっている。固定化されたイメージのために、トピックの深い背景を理解することができないのである。

「グローバル・エクスプレス」は、1997年１月に創刊された。年６回の発行で、2004年３月の第38号まで続いた。資金が途絶えたあと、オックスファム（Oxfam）に受け継がれ、2005年10月現在、42号まで発行されている。購読者アンケートや教師へのインタビューによると、開発教育の資料として非常に有効であり、開発教育に初めて触れる教員やすでになじみ深い教員からも高い評価を得ているという[6]。日本でも注目され、開発教育協会の招きで、編集者の一人であるキャシー・ミドウィンター氏が来日、講演した。また日本版「グルーバル・エクスプレス」の取り組みも始まっている[7]。

2.「クローバル・エクスプレス」の目的および基本的な学習領域

「クローバル・エクスプレス」の目的は、開発教育の視点や見方・考え方、グローバル・シティズンシップ、メディア・リテラシーなどの観点から、教師・生徒たちに対して、メディアを通して伝えられる開発問題に対する関心を高めることであり、次の５つがあげられている[8]。

(1)青少年が社会・経済的、歴史的、政治的、地理的背景の中で地球的課題や持続可能な開発の問題を理解し、それらは深く自分たちの生活と関わっていることに気づくこと。

(2)ますますグローバル化が進む社会の中で、青少年が地球市民としての役割について議論し、模索できるようにすること。

(3)メディアの報道に対し、青少年や教師の批判の目を養うこと―「南」（発展途上国）のできごと、そこに住む人々に対する私たちのイメージがメディアによってどのように影響を受けているか。

表１　「グローバル・エクスプレス」の5つの重要な領域

①メディア	生徒が、地球的な事件や開発問題をメディアが伝えることの意味をどう考えていけばよいか
②ステレオタイプ	当該の人びとや地域に対して生徒はどんなイメージや固定観念がもっているか、それにチャレンジするにはどうすればよいか
③共感	当該の人びと、特に生徒とは違った境遇にある人びとへの共感をどう育てるか、問題となっている事象や課題と生徒の日常との間にどんなつながりがあるかを見つけ出す。
④見方・考え方	問題となっている事象には多様な見方や考え方があり、それを検証し、確かめるにはどうしたらよいか。
⑤原因と解決	生徒が、ニュースで取り上げられた状況の原因と結果をどのように探求すればよいか。問題の解決や改善にはどんな方法があるか。

表２　「クローバル・エクスプレス」の冊子構成

前半６頁（教師向け）	表紙	興味をひくタイトル、写真や絵
	2頁	話題や事件の背景分析。メディアの取り上げ方。さまざまな視点や記事の引用
	3頁	記事についての誤解や作りの真相。よく聞かれる質問とその回答
	4頁	統計、地図、当該国の概要、歴史など、事実に基づいた資料
	5・6頁	教室でできる活動事例。アクティビティとカリキュラムとの関係。他の資料やホーム頁の情報
後半４頁（生徒向け）	7～10頁	８才から14才を対象にした新しい資料。取り上げられている話題に対してさらなる質問や生徒同士の議論を促す。 紹介された活動事例に関するもの（ニュースの見出し分析、絵を見ての議論、ロールプレイやクイズその他）

(4)さまざまな視点が含まれ、かつ入手しやすい情報源を通じて、「北」の青少年に「南」の人々の視点や価値観を伝えること。

(5)青少年や教師のニュースに対する「強い好奇心」を最大限に引き出すため、メディアが取り上げる問題に応えていくこと

これらの目的を達成するために、「グローバル・エクスプレス」は、5つの重要な領域を提示している（表１）[9]。それは、①メディア、②ステレオタイプ、③共感、④見方・考え方、⑤原因と解決という基本概念である。「グローバル・エクスプレス」の教材や学習活動の視点は、この５つの点が考慮されている。いずれも、メディア・リテラシーへの基本的な視点であると同時に論争的な時事問題を取り上げ、教材化（学習内容化）する際の重要な視点であるといえよう。

３.「クローバル・エクスプレス」の構成および各号のトピック・活動事例

「クローバル・エクスプレス」は10頁程度の冊子である。表２に示すように、前半6頁が、教員向けの解説であり、後半４頁が、ＫＳ2&3（8-14才）の生徒向けのワークシートや資料である[10]。

各号が、以上のような構成になっているのだが、では、各号のトピックやそこで紹介されている活動事例はどのようなものであろうか。1997年から2005年にわたって発行された42号分のすべてをここで紹介することは不可能であるから、各号のトピックと主な内容、活動事例のタイトルを表３に示してみた。

各トピックは、すでに「目的」に示したように、イギリスにおける開発教育の視点から、旧植民地であるアジアやアフリカなどに関わるもの、移民の子孫としてイギリス国内に暮らしている人々に関係し、だが、ふだんメディアでは取り上げられるのが少ないものが多い。

もちろん、「イラク」（第34号）や「津波」（第39号、インドネシアの地震と津波）に見られるように、各号ごとにまさに「旬の」問題が取り上げられ、資料や学習活動事例が掲載されている。資料・ワークシートなどは自由にコピーが出来るようになっていて、教師には使いやすいだろうと予想できる。

また、必ずしも速報的なトピックでなくても、森林や異常気象などの地球環境、イラクやアフガニスタンにおける紛争や平和、飢餓や貧困、難民や児童労働、子ども権利などの人権、洪水や地震などの災害、ワールドカップやオリンピックなどのスポーツといった、地球的な話題も取り上げられているのも特徴といえる。これらも、教師にとっては、利用価値のある教材といえよう。

４．トピックの選択基準と決定過程

ここで、素朴な疑問が生じてくる。では、このようなトピックは、誰が、どのようにして決めるのであろうか。

すでに触れたように、基本的なねらいは、メディアで話題となっていて、開発教育の視点、グローバル・シティズンシップ、メディア・リテラシーなどからみて有用なものであるから、大きな枠は決まっているのだろうが、話題になっているものが一つとは限らないし、速報性という点から見て、困難なものもある。

このような疑問に対し、編集者が示してくれたのが、資料1に示す「選定基準票」および資料2の「速やかな決定のためにプロジェクト」である[11]。

表3　「グローバル・エクスプレス」の各号のトピックと主な内容・活動事例（藤原作成）

号	発行年月	トピック	内容（概要・キーワード）	主な活動事例（ＫＳ2&3用）
1	1997.01	ニュース紹介 試行版	旧版では、5つの重要な内容領域を提示している。	「ニュースに触れたあなたの気持ちは？」「写真の中に身を置いて見る」「ニュースレポーター」「未来」「地図上の位置」「新聞記事のレポート」「テレビニュースのレポート」「用語解説」
2 ○	1997.03	中央アフリカ：グレートレイク地方の危機	紛争・難民、ルワンダ、ブルンジ、タンザニア、ザイール、ウガンダ、ツチ族とフツ族	「援助論争」「なぜ人々は戦うのか」
3	1997.04	投票、投票、投票：民主主義とは何か	国際的な文脈の中で民主主義をとらえることで、選挙や投票の大切さを検証する。	－（欠）
4 ○	1997.06	私たちの地球	人類と野生生物にとっての未来、特にゾウと象牙の取引の問題	「動物がいなくなと？」「ゾウと象牙」「何ができるか」「発展学習」
5 ○	1997.10	モントセラト：火山のもとでの生活	1995年と97年の火山噴火の影響、災害、被災地援助	「島でのくらし」「島にとどまるか、離れるか」「地図」「見方・考え方」「発展学習」
特1	1997.10	致命的な煙	東南アジアの森林火災	－（欠）
特2	1998.春	天候がおかしい？	－	－（欠）
6 ○	1998.01	エルニーニョ：	自然のいたずら、世界の気象の大混乱、因果関係の議論	「天候、それとも？」「こんなこと憶えている？」「快適な人もいる」「メディアに注目」
7 ○	1998.02	イラク危機：十分議論をしたか	メディアの紛争の伝え方、外交的解決とは何か、真実を伝えるための障害はなにか。教室の中の危機	「イラクはどこ？」「あなたの気持ち」「ニュースのみだし」「平和構築ロールプレイ」「熱心な記者」「イメージはできた？」
8 ○	1998.05	子ともの労働	児童労働に焦点をあてる。子どもの労働；神話と真実	「グローバルマーチ・ゲーム」「毎日の生活」「遊びの時間」「働くとは?」「児童労働は廃止すべきか」
9 ○	1998.06	サッカー：変革のための試合	ワールドカップ、人種差別・メディア	「世界地図」「叫びのくりかえし」「人種差別をなくせ」「代表国を選ぶ」「サディ（女性）はサッカースター」「サッカーボールを作ろう」「フランス語の練習」「代表チームの国旗」
10 ○	1998.09	洪水	バングラデシュ、中国、メキシコなどの洪水、洪水の原因と結果、神話	「水の対価」「バングラデシュの学校」「バングラデシュの洪水：原因と結果」「洪水のニュース報道」「バングラデシュ：川の水の旅」
11 ○	1998.10	飢餓；なぜ起きたのか	内戦、戦争、環境破壊、経済破綻によるスーダンの飢餓	「食べ物が手に入らないとは」「飢餓の原因」「飢餓のイメージ」「それなしでは生きていけない ― 土地は命」
12 ○	1998.11	ハリケーン：中央アメリカを通過	中央アメリカを襲った200年ぶりの大災害。被災地援助、経済（負債）	「ハリケーンって何？」「地図」「ラジオの警報」「援助」「ハリケーン・ミッチのツメ跡」「緊急援助」「人間のタクシー」「負債、それは公正か」

13 ○	1999.02	コロンビア：地震とコーヒー	20世紀最大の地震、主要輸出品のコーヒーの影響	「地震が起きる」「地震の後」「安全な建築」「目撃者」「コーヒーは木になる」「コーヒー・ロールプレイ」「コーヒークイズ」
14 ○	1999.04	巨大トマトか、十分な収穫か?：遺伝子組み換え食品	遺伝子組み換え技術に関する議論、食の安全	「私たちは食べる生き物」「私たちの食べ物はどこから?」「質問票」「うそ。ほんと？「遺伝仕組み換え品を想像する」「製品の表示」「遺伝子デザイナー」「論争に参加する」
15	1999.05	コソボ	セルビア爆撃、コソボ難民、バルカンでの紛争	「メンタル・マップ」「見方・考え方」「戦争では何が起きるか」「何を意味しているのか」（紛争の言葉）「解決に向けて出来ること」「逃れる理由」「報道の中のコソボ」
16	1999.09	東ティモール	住民投票、分離独立時の混乱の証言、武器取引・国連の役割・伝説	「東ティモールはどこ？」「東ティモールの伝説」「スパイスと米」「自由になる権利」「事実を作る」「国連の仕事」「討論：紛争の解決」
17 ○	1999.10	英連邦首脳会議	99年のパキスタンの軍事クーデタ、英連邦の現代的意義、歴史	「連邦ビンゴ」「実状ファイル」「市民質問表」「英連邦諸国」
18 ○	1999.11	ミレニアム	世紀の転換期の見方、祝福の仕方に見る文化の相違、未来観	「ふりかえり」（イラスト）「数える」「批評する」「祝う」
19 ○	2000.02	庇護を求める人びと	アフガンの難民の状況、メディアの見方、難民のくらしと権利	「イラストを見て」「庇護を求める人々-その意味」「新しい国における難民」「見出しに見る庇護を求める人々」
20 ○	2000.03	モザンビークの洪水	アフリカ南部を襲った洪水	「写真を見て」「成功の木の葉」「アフリカ南部の洪水」「援助委員会」
21 ○	2000.06	ジンバブエ：土地は共有できるか？	英国から独立20周年のジンバブエの歴史、現在。土地改革	「ジンバブエの昔と今」「選挙ロールプレイ」「インタビュー」「ニュースの中のジンバブエ」
22 ○	2000.09	オリンピック2000：スポーツ・ビジネス	オーストラリア。・シドニーオリンピック。本来の意義と商業化、先住民族	「オリンピックの話」「旗を掲げる（オリンピックとアボリジニの旗)」(写真)「キャシー・フリーマン」「環境保全とスポーツ」「オリンピック精神」
23 ○	2000.11	気候変動	気候変動の原因結果、地球温暖化とその防止	「うそ、ほんと？」「エネルギーの使用と輸送」「地球温暖化ニュース（見出し)」「どちらがエネルギー？」(写真)
24 ○	2001.02	地震の後	インド・ガジャラ地方の地震、被害、地震の予知、備え	「ガジャラはどこ？」「備える！」（写真）「インタビュー」「地元での活動」「ニュースの視点」
25 ○	2001.03	畜産業：地域で、世界で	英国で起きた牛の口蹄病（狂牛病)。食の安全とグローバル化	「メンタルマップ－牧畜」「乳搾りの時間」(写真)「南と北の牧畜のあり方」「牧畜とは」
26 ○	2001.05	イスラエルとパレスチナ：約束の地?	100年以上も続くイスラエルとパレスチナの紛争。この地の歴史、パレスチナ人の土地喪失、メディアの扱い方	「対立の図」「平和の大学」「難民は語る」「対立と権利」「戦争と平和のジャーナリズム」

27 ○	2001.07	抵抗、権利、市民権	反グローバリゼーションの意思表示、2001年イタリア（ジェノヴァ）サミット、メディア乃取り上げ方	「権利を求めて」「自分の主張」「抵抗のイメージ」（写真）「自由貿易反対」
28 ○	2001.10	攻撃を超えて：地球市民を創る	9.11世界貿易センターとペンタゴンへの攻撃、メディアのニュース報道、イスラム教徒への偏見と人種攻撃	「イメージを作る」（写真）「違いを尊重する」「気持ちを共有する」「認識を作り上げる」
29 ○	2002.02	アルゼンチンが危機に沈む	アルゼンチンの債務危機、くらしへの影響、IMFの役割	「サッカー」アルゼンチンとは」（写真）「未来への希望」「経済を定義する」「債務に苦しむ」
30 ○	2002.03	ジンバブエ：大統領選挙	2002年3月の大統領選挙についての報道、民主的なプロセス	「英国とジンバブエのつながり」（写真）「民主主義とは何か」「ジンバブエの人の視点」「メディアが強調するもの」
31 ○	2002.05	子どもの権利：世界子ども会議での発言	5月8日は10年ぶりの国連子ども会議。子供サミットで論じられた課題	「権利を求めて」「子どもに耳を傾ける」（写真）「進歩する」「子どもを第一に」「戦争から子どもを守ろう」（少年兵）
32 ○	2002.06	世界規模の試合：ワールドカップ2002	真の世界スポーツとしてのワールドカップ。サッカーが搾取とエンパワーの両方をめざしてきた。	「グローボール・クイズ」「ダイヤモンドランキング」（イラスト）「ワウォー」（写真）「サッカーと女子」「ゲームのスポンサー」
33 ○	2002.10	地球サミット2002：何が現実に起きているか？	ヨナネスバーグ地球環境サミット。課題となった水問題	「サミットとは？」「トイレの洗浄水」「安全な水」「言葉の水滴」「あなたがいいたいこと」「過去を振り返り、未来を見つめよう」
34 ○	2002.11	イラク：解決への模索	議論となっている国連のと孤立した超大国アメリカの役割、大量破壊兵器テロ攻撃、安保理の役割に対する相反する見方	「地図を手に持って」「紛争の解決-議論の分類」「バグダッドー地球市民」「新聞記事の中のイラク」「私の知っているイラク」
35 ○	2003.02	入国管理：難民は歓迎されている？	イラク戦争と英国の入国管理、難民の受け入れの論争問題	「ホームとは心安らぐところ」（イラスト）「正しい言葉はどれ？」「難民」「ファハドの話」
36	2003.03	忘れられた飢餓？	イラク問題によって忘れられているアフリカの20年ぶりの飢餓	「全員が平等に」「飢餓の地図」「飢餓の原因」「大飢饉」「言葉で訴える」
37	2003.06	戦争下のメディア	イラクの戦争の報道が続くが、果たして正しいのか。戦争のイメージ	「自分でニュースを書項」「戦争のイメージ」「イラクの再建」「批判的に探求する」
38	2004.01	フェアトレード	私たちは貿易に依存しているが、その仕組みに問題がある。世界貿易、より公正な貿易	「公正それとも不公正?」「私たちのバナナを育てる」「倫理的であること：フェアトレード商品を買う」「南北格差」「貿易のルール：これでいいのか」「正義のために活動する」「フェアトレードの利益・利点」「それはあなた方の選択」「地域の中のフェアトレード」
39 ○	2005.01	津波:世界を変える事件	東南アジアを襲った津波に対し世界中からの人道的支援。世界の貧困を終わりにする政治的な意思へと向かう。	「私たちの反応」「災害とは何?」「原因と結果」「災害への対応」「貧困を過去のものにしよう」

40	2005.04	アフリカの正義	イギリス・サミットの話題。アフリカについて債務救済、援助、貿易ルールの変更。不正義の歴史と変革への展望	「アフリカについて知っていること」「ロニアの話」「アフリカから朗報！」「誰が世界を支配する？」
41 ○	2005.06	協力	7月2日は国連国際協力デー。協力の意義と社会の調和と正義の意味	「協力について考える」（写真・イラスト）「協力の四角形」「開発のための協力」「Young Co-operatives」（NGO）
42 ○	2005.10	私たちはここまで来た：貧困を過去のものに！	英国サミットG8に導かれて若者たちが、「貧困を過去のものに！」という活動に参加している。援助、債務、貿易に焦点を当てる。	「G8ビンゴ」「ニュースをイラストにする」「ライブ8：あなたの判定は？」「なぜホワイトバンド？」「ミレニアム開発目標」「私の約束、あなたの約束」

（注）・Development education Project Global Express, 2004,Development Education Centre,
http://www.dep.org.uk/ge/gepreveditionlist.php （新版）2006.09.01閲覧
http://www.dep.org.uk/globalexpress/index.htm（旧版）2006.09.01閲覧
・OXFAM http://www.oxfam.org.uk/　2006.09.01閲覧
・○を付した各号は、Development education Projectのサイトからの PDF版冊子としてダウンロードしたり、活動事例が閲覧できるもの。

編集者は、オランダ、スペイン、イタリア、アイルランドなどヨーロッパの開発教育・グローバル教育の諸団体およびPanos（ロンドンにある開発問題に関わるジャーナリスト系NGO[12]）と協力して、「グローバル・エクスプレス」に掲載できそうな事件についてメールで、「選定基準票」を回覧し、たいてい24時間以内にどの事件をとりあげるかが決定するのだという。

資料１によると、選定基準となる項目は、けっこう多いことがわかる（参考までに、2002年のイラク戦争を扱った第34号に関する記入項目を例としてあげておいた）。

①メディアの報道の有無（量）、②主要メデイアの取り扱い、③子どもの興味・関心、④主要なメッセージ（伝えたいと思う考え）、⑤「南」と関連すること、⑥関連する開発問題、⑦生徒の経験や生活に結びつくこと、⑧監修可能な「南」の人がいること、⑨メディアの誤解や神話、⑩一緒に扱える情報や材料の有無、⑪役立つウエブサイトや他の資料の有無、⑫役立つ写真や図表のアイデアの有無、⑬実施可能な関連教科の存在、⑭関連する授業のアイデアの有無、⑮その他コメント

特徴的なのは、ヨーロッパ各国の諸団体だけでなく、南の国々との協議を経て（項目⑤）、トピックが選ばれていることである。取り上げたトピックの関連団体が出版前の原稿を読むことで、正義、平等、寛容といった開発教育の理念に基づいた記事を提供したいという願いをみてとることができるだろう。

一方、資料2によると、「選択基準票」によってトピック

資料１　グローバル・エクスプレスの題材決定のための選択基準票（右欄は第34号についての記入例）

意見を述べている・提案している機関の名前 もし他の機関の意見について自分の意見を述べる場合は、賛成か反対か、それはなぜか、その題材を提案する理由として述べてください。	今回は基本的にCEMによる編集である DEPのコメント （記載なし）
日付・時間	2002年10月1日
可能なトピック	イラク
別の見方	（記載なし）

（提案された題材こついて以下の空欄を埋めて下さい）

①その題材があなたの国のメディアでどう報道されているか。（どれくらい長くその題材がニュースで扱われるかも含む）	少ない	ふつう	○多い
②主要なメデイアがどうその話題を扱っているか、簡単に	アメリカの立場の説明、ブッシュやブレアが主張する武器をサダム・フセインが保持しているか否か。石油などの配分を誰にするか。国連安保理常任理事国内の意見の相違		

③あなたの国の子どもたちがこの話題を知っている、もしくは興味をもつと思うか。	知らない	ふつう	○よく知っている
④この票の取り組みを進めるために必要なキーメッセージは何か。	戦争が問題を解決するわけではないという十分な証拠になっている。なぜ今戦争なのか・ブレア・ブッシュの課題なのか？私たちの国は参戦しており、それゆえに、戦争宣伝に目を向けるべきである。もしアメリカが傍観するなら国連は問題解決に役割を果たせるだろう。		
⑤「南」と関連することでもっと追求して欲しいことは何か。	アメリカとその同盟国が、湾岸と中東地域にひそかに害を与えていること		
⑥関係があると考えられる開発問題は何か?具体的に	石油貿易、食料計画のための石油、戦争と平和・紛争の概念変容、国連の役割；南北関係における権力、人権：もしフセインが再武装すればその時は制裁が不可能であり、子どもが無駄に死んでいくかもしれない。		
⑦あなたの国の生徒との関係?この問題に関する生徒たちの経験、生徒の生活に結びつく要因など詳細に	生徒は戦争のイメージと向き合うだろう。そして関心と疑問を持つだろう。2001年9.11米国同時テロ後、現在、英国のイスラム教徒の子どもにとっては難しい立場にある。		
⑧下書きを監修できる「南」の人がいれば、詳細に	少ない	○ふつう	多い
⑨あなたの国のメディアが強く伝えたり、逆に報道していない話題や根拠のない説、誤解を3つあげる。	1，リテラシー：今回の経済制裁や英米の現在の攻撃にはめったに言及されないこと 2，神話：イラクは他の中東諸国と切り離せること 3，神話：戦争は避けられないこと		
⑩この題材と一緒に扱える情報や材料があるか	少ない	○ふつう	多い
⑪役に立つウエブサイトや他の資料	イラク行動連合 http://leb.net/IAC/ ムスリムニュース　www.muslimnews.co.uk 国連石油食糧計画 http://www.un.org/Dept/oip/		
⑫役に立ちそうな写真や図表のアイデア	漫画（ポリプ）、中東地図、イラクの普通の人々		
⑬この題材とつながるカリキュラムは何？	市民科／PSHE、地理、歴史、宗教		
⑭この題材に関する授業のアイデア	メディアの言説を注意深く検証すること（敵に対する偏見など） 戦争と平和の選択に対するコントロール 国連および国連の解決の役割-学校の生徒会と関連して		
⑮その他コメントがあれば書いて下さい。	私たちの何人かは、この題材についてはすでに取り上げたことがあるので、第2編にあたるものだということに留意する。		

資料2　速やかな決定のためプロジェクトーイラク2002に関する編集進行表

事項	期日（(2002年)
CENによる選択基準票の準備と全員による承認	--
進行表への同意	10月21日月曜
背景の原稿：Panosが書き、DEPにわたる	11月8日月曜
活動事例の原稿：DEPが書き、Panosにわたる	11月8日火曜
両者のコメントが他のパートナーに渡る：編集者に戻る	11月6日水曜
原稿：原稿ができPanosにわたる	11月7日木曜
Panosが初稿にコメントを書き、編集者に回す	11月8日金曜
最終稿の承認	11月8日金曜
印刷に出す	11月11日月曜
印刷が戻る	11月14日木曜
購読者に郵送する	11月15日金曜
購読者が受け取る	11月18日月曜
コメント ＊担当者のコメントとして編集から少し離れていたとか、Panosの会合があったとか、CAFODがグローバル・エクスプレスの冊子を置いてくれるとかなどが、手書きで書かれている	

を決定してから、活動事例を含む冊子ができ上がる過程がよくわかる。第34号（「イラク」2002）の場合、Panosが11月4日に原稿を考え、編集者（マンチェスター開発教区センター）が11月5日に教材化を考え始めてから、最終稿ができるのがその週の8日にできている。そして翌週に印刷に回し、最終的に郵送して購読者にわたるのが、18日（週明け）である。速報性を維持するために、少人数のチームでトピックを選び、ほとんどの号を2・3人で編集するという、そのプロセスが伺われて興味深い。

5．事例：第34号「イラクー解決を求めて」の内容構成

次に、「グローバル・エクスプレス」の内容構成を具体的にみるために、引き続いて、第34号「イラクー解決を求めて」を例にとりあげてみることにする（表4）[13]。2002

表4　第34号「イラクー解決を求めて」の内容構成（藤原作成）

頁	概要
表紙	タイトル「イラクー解決への模索」。 概要：教科などとの関連、活動事例名。2枚の写真（国連の車とイラクの少女）2つのリード文：トピックのねらい（イラクに対する戦争の脅威への賛否両論、国連の役割および唯一の超大国でありつづけるアメリカの役割）
2	「真実は戦争の最初の犠牲者である」（解説資料） 概要：イラクに対する戦争の脅威にたいする時事解説。1.英米の民主主義と平和のための戦いというたてまえと石油資源獲得の本音といった構図、2.イラクのフセイン独裁政権と亡命者・追放者の対立、3.英米の大量破壊兵器に関する独自の報告書と国連武器査察団の対立（英米と国連の役割）、平和と戦争に関する国際システム（単独主義か集団安保か）、4.反戦派の不十分な証拠による戦争、5.大量破壊兵器について安保理常任理事国やインド、パキスタン、イスラエルなどの保有を米英が問題としないダブル・スタンダードなど、相反する見方を示す。
3	「孤立への道?」（解説資料）と新聞記事の引用 概要：1991年の旧ソ連崩壊後、「平和の配当」が期待されたが、唯一の超大国として残ったアメリカの単独行動が懸念されるようになった。安保理を中心とする国連の集団安保システムとの対立である。イラク戦争の本質は実はこんなところにある。2001年の9.11テロから始まるテロとの戦いは、アルカイダの拠点とされるアフガン攻撃、フセイン政権の打倒と続く。大量破壊兵器の有無をめぐる国連の査察と、「悪の枢軸」と呼び、「体制の変革」を迫る米英。中東諸国は、問題の根源はパレスチナ問題であるといい、「次は自分たちが標的になる」と恐れる。アラブへの西欧的価値観に反発するアラブへの偏見なども背景にある。引用されている記事は、ホワイトハウス報道官、ブッシュ大統領、パキスタン政府、イランのニュース、イラクの住民、アラブの意見など、多様な意見を掲載。
4	イラクの歴史を示す年表と用語解説、イラク周辺地図 概要：古代イラク文明（紀元前3?4千年前）、バグダッドの首都（762）、アラブ文明の興隆（8世紀から13世紀）、イギリスのイラク征服（1917年）、独立（1932）、アラブ連盟と国連加盟（1945）、フセイン大統領就任（1979）、イラン・イラク戦争（1980-88年）、クウェート侵略（1990.4）、湾岸戦争開始（「砂漠の嵐」作戦1994..1）、イラク撤退。停戦合意（1991.2）、国連「石油と食料」計画（1995.4）、、国連の武器査察失敗・米英「砂漠の狐」作戦（1998.12）、9.11後ブッシュ「テロとの戦い」、ブッシュ、国連に対イラク戦争提起（02.09）、サダムに100％の国民支持（02.10）、「国連総会決議」1441。イラクの武装解除と武器査察（2002.11）など。用語解説は、「外交的解決」「石油と食料」計画「国連総会決議」「制裁」「国連安全保障理事会」「UNMOVIC」「UNSCOM」など。
5	教室でできる活動事例とねらい、対象学年、カリキュラムとの関連 1.「地図を手に持って」2.「紛争の解決」3.「バグダッド」4.「新聞記事の中のイラク」5.「私の知っているイラク」（詳細は表5参照）
6	推薦したい資料、ウエブサイト、グローバルエクスプレスの注文票 資料は、雑誌『ニューインタナショナリスト』やオックスファム、国連の出版物、『イスラム写真集』など。ウエブサイトは、「ガーディアン」（新聞社）、国連、赤十字、英国イスラム社会、イスラム人権委員会、UNDP、ワン・ワールドなどの紹介
7	活動事例2「対立の解決」について 「対立のピラミッド」という議論の仕分けの活動を行なうためのワークシート
8	活動事例3「バグダッド」について イラクの首都バグダッドの歴史などに触れた資料。「私の街、バグダッド」というニューヨークの詩人が書いた詩（9.11ニューヨークと爆撃を受けてきたバグダッドの交錯）とワークシート
9	活動事例4「新聞記事の中のイラク」について 7つ（ドイツ、アメリカ、エジプト、タイ、イギリス（2社）、イスラエル）の新聞記事とワークシート
10	活動事例5.「私の知っているイラク」について 活動を行なうための資料（爆撃によって恐怖やトラウマを受けるイラクの子どもたち。しかし、外国人を受け入れようとするふつうの人々のくらしや思いを提示する。専門家や政治家が提供する異なるイラク像が示されている。）

年イラク戦争を例にとってトピックの選択および決定のプセスを示してきたからである。

すでに表2において冊子構成の枠組みを示しているが、第34号の場合も前半6頁が教員用の解説やサポートになっている。表紙には、協力団体であるPanosの記者が撮影した写真と2つのリード文が、この号のトピックとテーマの意図を明示している。

2、3頁は、力のこもった解説資料である。2頁の「真実は戦争の最初の犠牲者である」という解説は、メディア・リテラシーの意義を問うもので、批判を中心とする時事問題学習に欠かせない視点である。3頁の「孤立への道?」は、冷戦後（あるいは9.11以後）の国際社会システムの変化を論じたもので、「超大国」アメリカの単独行動主義と国連の集団安全保障体制との矛盾・対立がこのトピックを考えていく枠組みであることを教えている。

4頁は、イラクの歴史（年表）と用語解説、イラク周辺地図である。歴史は、メディアに流れる映像がフセイン大統領や湾岸戦争ばかりで、ともすれば「悪玉」イメージを固定化してしまいがちな傾向に対し、イラクが、古代文明やアラブ文明の中心地であったことなど歴史認識として重要な項目もあげられている。年表や用語解説や地図は、活動事例で活用できるものである。

5頁には、「グローバル・エクスプレス」が提案する学習活動事例が5つ提案されている。学年や教科（カリキュラム）との関連も大枠が示されている。表5にはその概要を示しておいた。これらは、生徒用のワークシートや資料とともに、教師が教室で授業をやってみたいと思わせるような具体性にとんだものである（冊子の編集者には学校教員の経験者もいる）。6頁は、参考資料である。

7頁以下は生徒用ワークシートであり資料である。参加型学習をはじめとして多様なアクティビティが紹介されている。

6.活動事例「新聞記事の中のイラク」の場合（展開構想案）

冊子の5頁に提案されている活動事例について、学年（対象年齢、KS2&3）、実施可能な教科、ねらい、すすめ方（概要）、表1の基本領域との関連、といった項目に分けて具体的に示してみた（表5、教科・基本領域との関連については筆者が付加した）。

各活動事例は、特定の教科を指定したものではない。事例1「地図を手に持って」のように教室全体を使った体験的な学習もある。事例2「対立の解決」のように、イラク

表5　第34号「イラクー解決の模索」5つの活動事例の概要（藤原作成）

活動事例1「地図を手に持って」

教科・学年	地理・8－14歳（KS2&3）
ねらい	世界の中のイラクの地理について知識を増やす
展開の概要	・教室か広い場所の真ん中にたって、「私は、イラクの首都、バグダッドにいます」という。 ・東西南北を示し、ペアになった生徒に、国連常任理事国であるアメリカ、英国、ロシア、フランス、中国、および、教員が選んだその他の国々の場所に立つように指示する。 ・生徒は各国の場所について話しあう。地図か地球儀を用意しておくとよい。 ・4頁の地図をA3用紙の真ん中に貼り、コピーをして、各ペアに1枚づつ配布し、生徒はそれをもって移動し、各国が該当する位置に印をつけ、「メンタル・マップ」を作る。 ・印がない場合、国名を尋ね、地図を完成させる。 ・「イラクは英国やアメリカより大きいか小さいか」と尋ね、クラス全員で世界地図を見る。
基本領域との関連	「見方・考え方」

活動事例2「対立の解決」

教科・学年	PSHE・8－14歳（KS2&3）
ねらい	違った考え方で対立の解決をさぐる。
展開の概要	・「対立のピラミッド」）を使う。生徒に対立とその解決について、最初は一人で、次にグループで、考えるように言う。低学年の生徒には支援が必要。 ・生徒たちが考えていた解決策とは異なる解決カードを各グループに1枚を配る ・彼ら以外のクラスの生徒には、各グループの考えていた解決策を実行するようにいう。各生徒は、そのときに話をしたり聴いたり助けを求めた人について、どのようなことだったかを書く。 ・最後に、最善の解決策を選び、その理由を述べる。 ・対立のピラミッドは、現在のイラクの危機や他の紛争の原因を考えるのに応用できまる。しかし、それには生徒への支援が必要で、他の活動での学習や議論を経てやった方がいいだろう。
基本領域との関連	「共感」、「見方・考え方」

活動事例3「バグダッド」

教科・学年	リテラシー、PSHE、歴史　11歳から14歳
ねらい	歴史とくらしの場所としてのイラクとその首都の絵を描く。
展開の概要	・バグダッドに関する事実と、別のイメージを提示する創造的な文章がある。あるニューヨーカーが書いた詩は、2001年9月11日のニューヨーク攻撃と1991年およびその後のバグダッドへの爆撃の両方に対して興味あるコメントを示している。 ・「詩は双方の状況のうちどちらを描いているか」「詩は、両方の都市における人々の経験や気持ちを理解するのにどのように役立っているか」をクラスで話しあう。 ・詩を書いた理由について議論をする。生徒は共感、社会的良心、あるいは詩人にはバグダッドに友人か家族がいるのではないか、といったことをいうだろう。 ・この詩が地球市民であることの例になるのか議論する。
基本領域との関連	「共感」、「ステレオ・タイプ」

活動事例4「新聞記事の中のイラク」（詳細は表6参照）

教科・学年	シティズンシップ　11歳から14歳
ねらい	報道の中で使われる言葉と偏見を分析する。
展開の概要	・生徒用頁3（新聞記事）と一緒に使うために、教員用頁4の用語解説を生徒に配付する。 ・生徒に別々の色で事実と意見について下線を引かせ、それについて議論させる。 ・活動の終わりに、どんな言葉が偏見を生み出すのか議論する。 ・発展的な活動では、http:／／www.transnational.org／new／TNN.htmlのサイトから世界のニュースをえらんで記事の見出しを活用できる。 ・キーワードに下線を引き、戦争に反対か賛成か、立場にしたがって分類する。
基本領域との関連	「メディア」、「見方・考え方」「原因と結果」

活動事例5「私が知っているイラク」

教科・学年	シティズンシップ　リテラシー　11歳から14歳
ねらい	ステレオタイプに挑戦し、イラクのふつうの人々に共感する。
展開の概要	・生徒用頁4の資料を読み、議論する。「制裁」のように説明が必要なところもある。「驚き、それとも衝撃？どちらか」、生徒は、イラクにいるジャーナリストの身になって、はがきや手紙を家庭に出してもよい。もしイラクを訪問するならどんな質問をしたいか ・ここでは困難で矛盾をはらむ問題が取り上げられる。イラクにおける紛争の脅威は、イラクや隣国、あるいは軍隊に、家族や友人がいる子どもたちにとっては、情緒的で個人的な問題である。 ・子どもたちの中には、小グループや1対1で質問したい子もいるかもしれない。 ・　第7号「イラク危機」もこれらに関連している。
基本領域との関連	「メディア」、「ステレオタイプ」、「見方・考え方」

戦争のトピックなのに、教室の中の対立を、「対立のピラミッド」という手法を使って、対立の原因・結果を身近に考えさせるものもある。事例3「バグダッド」は、ニューヨークの詩人が書いた9.11ニューヨークとバグダッドの爆撃をオーバラップさせる詩が掲載されている。英語やリテラシーの時間にじっくりと鑑賞し、気持ちの共有を深めるのに有用である。事例5「私が知っているイラク」は、マスメディアが伝えないバグダッドの子どもたちやふつうの人々の状況について考えさせるものである。

表6に、事例4「新聞記事の中のイラク」の授業展開予想案を示したのは、シティズンシップや社会科で実施可能であり、本稿の研究の意図でもある「判断・批判を中心とする時事問題学習」の検証に有効と考えたからである。このような冊子教材の場合、授業のすすめ方は、おおまかな概略しか示されていない。また、討論や話し合い、参加型学習などが多い。授業の意図やねらいを検証するためには教授学習過程を想定した授業展開案を作成することも必要である。

小さなワークが5つある。単元的には2, 3時間の授業構成と考えてよいだろう。生徒用資料には、インド、アメリカ、エジプト、タイ、イギリス（2紙）、イスラエルという6か国・7社の新聞記事が、8月27日から11月11日までの日付で集められている[14]（驚くことに資料2と照合すると印刷に出す間際の11月11日まで掲載する記事を選んでいたことになる）。

KS3相当とはいえ、日本では中学生である。新聞記事には生徒には難しい言葉や用語がある。その意味で、小ワーク①に、生徒にわからない言葉の意味を質問させたりしているのは、導入として妥当であろう。新聞を読めるリテラシー力は基本的な学力であるといえる。

小ワークは、戦争と平和をイメージさせる言葉が、メディアの中にどう使われているか、メディアにおける修辞（レ

トリック）も含めて、メディアの「見方・考え方」を分析させようとするものである。小ワーク②は、この作業を踏まえて、各国の新聞のメッセージの違いや多様性を、問題に対する立場の違いとともに、理解させるものである。これらは日本のNIEでも試みられるものであるが、国内四大紙の比較に留まることが多い。イギリスの場合、英語を母語とするので、世界の新聞が読めるというのは強みである。

小ワーク③の後半の「平和的な」言葉のみを使って、記事の1つを書き直させるのは、どんな意味があるのだろうか。レトリックのスキルとともに、ポジティブなメッセージの重要性を学ばせたいからなのだろうか。通常、日本の授業では、ここまで視野が届かない。

小ワーク④は、問題の背景を、メディアの記事から読み取らせるものであり、「原因・結果」の学習を意図したものであり、行間を読むというべきか、批判的に読み解いていくメディア・リテラシーの重要な部分である。かつ、因果関係や背景を説明せずに表層的な記事ばかりの新聞への批判力にもなるだろう。

小ワーク⑤は、生徒に一つの価値判断をせまるもので、個人の判断とその理由を表明させている。生徒は、恣意的な好き嫌いから選ぶ場合も当然ありうるだろうが、理由づけを課すことによって自己の意思を論理的に説明する力を身に付けさせようとしていることがわかる。

表6　活動事例4「新聞記事の中のイラク」の授業展開予想案（教授学習過程に換えて藤原作成）

小ワーク①（教師；T，生徒：Pで示す、以下同じ）
T1. 2人1組のペアになって、7つの新聞記事（生徒用資料）に目を通しなさい。
P2.　目を通す（音読または黙読）。
T3. わからない言葉があればいいなさい。
P3. 「武装解除」「国連武器査察」「大量破壊兵器」「国連総会決議」「アルカイダ」「9. 11」など。
T4. 解説する（冊子4頁の用語解説など参考に）
小ワーク②
T5. 戦争（例「脅威」）や平和（例「回避のための行動」）を示唆するような言葉に、別の色で下線を引きなさい。
P5. 下線を引き、全体に発表する。戦争：危機、排除、一撃、渾沌、大量破壊兵器、独裁者、脅威など。平和：武装解除、戦争の回避、反戦デモ、外交的手段など。どちらか迷うもの：武器査察など
小ワーク③
T6. どのニュースが、戦争反対の態度を伝えているか。印をつけなさい。
P6-1. インド、エジプト、タイの新聞やイギリスの「ガーディアン」が戦争反対。アジアには反対の態度が多い。
P6-2. しかし、インドの新聞は、戦争が起きてもドイツは参加しないといっているだけだ。
P6-3. タイの新聞も、やがては戦争が起きることを示唆している。
P6-4. アメリカ、イスラエルの新聞が戦争賛成だ。
P6-5. イギリスの「オブザーバー」はどちらともいえない。中立的?
T7. 「平和的な」言葉だけを使って、これらの記事の1つを書き直すことができますか。
P7　たとえば、タイの新聞を次のように書き直してみた。見出し「アジアは、イラクが自らを民主化することを望んでいる。」記事「タイがそうであるように、アジア諸国のいくつかも、痛みに耐えて自らを民主化してきた。イラクは、独裁者が退いて、よりよい世界が来るべきである。だからといって、このことが。サダム・フセインと9. 11テロやアル・カイーダとの関係を示すものではない。それを示す重大な証拠はなく、イラクを侵略する理由はない。」
小ワーク④
T8. イラクとの戦争をひきおこす原因や結果について知らせている記事があれば、書き出しなさい。
P8. イラクの大量破壊兵器の製造疑惑、軍備増強（インド、タイの新聞）、フセインの独裁（タイ、アメリカの新聞）、イラクの国連武器査察の拒否（タイ、エジプトの新聞）、アメリカの一撃（エジプトの新聞）、イラクの石油資源（イギリスの「オブザーバー」）、英米の単独行動主義（イスラエルの新聞）など
小ワーク⑤
T9. もっとも賛成できる記事はどれか。それを選んだ理由もいいなさい。
P9-1. インドの新聞。英以外のEU（ドイツ）の意見を伝えているから
P9-2. アメリカの新聞。戦争には反対だが、フセインのイラクは自らを民主化できないから。
P9-3. エジプトの新聞。アラブ諸国のことはアラブに任せる方がいいから。
P9-4. タイの新聞。9. 11テロやアルカイダとイラクとを結びつける考え方を批判的に伝えているから。
P9-5. イギリスの「ガーデァイン」。戦争に反対する人々の意思を伝えているから。
P9-6. イギリスの「オブザーバー」。イラクと戦争をしたがっているアメリカの「隠された意図」を伝えているから。
P9-7. イスラエルの新聞。イラク戦争は英米の単独主義的な行動であることを教えているから。

生徒用資料：「新聞記事の中のイラク」
1．ヒンドスタン・タイムズ「ドイツ政府高官：イラクとの戦争は回避できる」、インド，2002年10月29日ドイツ政府高官G．シュローダーは、火曜日、もしバグダッドが武装解除すれば、イラクとの戦争は避けることが可能だと信じていると発言した。しかし、ドイツはどんな軍事攻撃にも加わらないと繰り返した。
2．ワシントン・ポスト「いまこそ行動を」、アメリカ合衆国，2002年9月6日危機はすぐそこにある。サダム・フセインを排除せよ。
3．アソシエティッド・プレス，「アラブ諸国はイラクに戦争を回避するように求める」、エジプト、2002年8月27日アラブ世界のアメリカの同盟諸国は、アメリカのイラクへの一撃がすでに不安定なになっている地域をさらに渾沌化するだろう。アラブ世界は、イラクに戦争を回避するように求め、かつ、アメリカのイラク攻撃に反対する意思を繰り返し表明している。両国は外交的手段で争いを解決すべきであるという。また、武器査察に関する国連決議を実施するようにも求めている。
4．バンコク・ポスト，「アジアは痛みに耐え、その任務を実行しなければならない」、タイ、2002年10月22日イラクの体制はひどい。政府は大量破壊兵器の製造を望んでいる。独裁者が死に、よりよい世界が来るべきである。しかし、これらのことのすべてが、9.11以後を変えるものではなく、またイラクを特別にするものでもない。サダム・フセインとアル・カイーダの関係を示す重大な証拠がなく、イラクを侵略する理由はほとんどなく、またそれを急ぐ必要もない。
5．ガーディアン「50万人が反戦デモに参加した」、イギリス、2002年11月11日ヨーロッパ中の戦争に反する50万人以上の人が週末にFlorence通りをデモ行進した。
6．オブザーバー「「しかし、彼らは我々をなぜ憎むのか」、イギリス、2002年10月20日イラクは、この4年間なかった国連の武器査察官の帰国が差し迫り、アメリカの攻撃の脅威に直面している。しかし、多くの人は、「体制の変革」の約束が達成されたときのアメリカの意図について関心をもっている。多くの人は、世界第二の埋蔵国であるイラクの石油が、問題の核心であると信じている。
7．エディトリアル・イン・エルサレム・ポスト「ブレアの報告書」、イスラエル、2002年9月25日 多くのヨーロッパ諸国が、イラクに迎合し、アメリカ合衆国を無視しているときに、ブレアは、サダムに対し、政治的勇気をもって勇敢かつ説得ある形で対処しようとしている。

7．おわりに

以上、「グローバル・エクスプレス」は、社会におけるメディアの重要性を認めた上で、開発途上地域の人々やくらし（事例ではイラク）に対して、メディアによって固定化されたイメージを改めようとしている。そのために、メディアの情報源や表現を分析し、メッセージの背後にある原因や結果、社会関係（事例では英米や国連の役割、イラクの石油資源など）を批判的に認識しようとしていることがあきらかになった。このような意味で、「判断・批判を中心とする時事問題学習」になりえているといっていい。

しかし、いくつかの課題も指摘できる。

まず、学習上の課題として、多文化の子どもが教室にいる場合のアプローチが考察されるべきであろう。イギリスの場合、旧植民地出身の移民や東欧・アフリカ出身の難民の子どもたちも多い。国籍はイギリスにあっても親や地域によっては宗教や文化的背景が多様である。特にイラク戦争の場合のように、イスラム教徒に「厳しい目」が向けられている場合、意見の分裂のようなことがおきないか、教室の授業での配慮が必要であろう。新教科「シティズンシップ」はこれに対する政府の回答であり、イギリス人（イングリッシュまたはブリティッシュ）として、もしくは、地球市民（グローバル・シティズン）としての共同的な「契約」をめざすものである。このようななかで、ヨーロッパ各国のNGOが協力して発行している「グローバル・エクスプレス」は、政府から一定の距離をおいたグローバルな視点の提供に寄与しているといえる。

次に、「グローバル・エクスプレス」研究の課題としては、各号に紹介されている活動事例（特に、アクティビティ）の学習方法的な観点からの分析や考察が残っている[15]。

また、時事問題学習に関する研究上の課題としては、本論文の冒頭に示したように、「判断・批判を中心とする時事問題学習」以外の、「説明」「意思決定」「社会参加」の学習原理を中心とする時事問題学習について考察することが残されている。これについては、「社会参加」学習など別に触れたことあるが[16]、今後の研究に待つことにしたい

最後に、市民運動領域でいえば、「グローバル・エクスプレス」のような試みを日本で実践する上での課題である。時事問題学習の世界性と速報性、分析力やリテラシー力と、教員個人の教材開発能力や専門性とは矛盾するがゆえに、すなわち教員個人の力量では手に負えないがゆえに、このようなNGOによる組織的な取り組みは、日本においても、非常に意義があるといえる。しかし、東アジアや東南アジアの文脈では、ヨーロッパのように、政府から独立したNGOの存在が少なく、国民を超えた共通の視点ともなるべき地球市民的な共同性・協約性が成熟していない。組織的

な対応とグローバルな視点の共有は、今後の市民運動の大きな課題とも言える[17]。

注

1　藤原孝章「時事問題学習の現代的意義と単元開発の方略」同志社女子大学『総合文化研究所紀要』第23巻、2006年、81-96頁。

2　キャシー・ミドウインター「『時事問題』」を教室に－『グローバル・エクスプレス』の経験から」開発教育協会『開発教育』47号、2003年、62-67頁。

3　同上。

4　Development education Project Global Express, 2004, Development Education Centre, http://www.dep.org.uk/index3.php　2006.09.02閲覧。

5　藤原孝章「アクティブ・シチズンシップを育てるグローバル教育-イギリス市民性教育Get Global!の場合-」同志社女子大学社会システム学会『現代社会フォーラム』No.2、2006年、21-38頁。

6　注2、同論文。

7　開発教育協会 http://www.dear.or.jp/　日本版「グローバル・エクスプレス」http://www.globalexpress.jp/

8　注2、同論文。

9　Global Express Edition 1 : TUNE INTO THE NEWS The introductory edition of *Global Express* http://www.dep.org.uk/globalexpress/index.htm （old website）2006.09.02閲覧

10　注2, 同論文。

11　注2, 同論文およびCathy Midwinter氏本人とオックスファムの担当者Angella Grunsell氏（当時）へのインタビューによる（英国調査2005年9月8日）。資料1および2についても、第34号の編集の際の記入例（手書きのメモ）とともに入手することができた。

12　Panos : http://www.panos.org.uk/about/index.asp

13　Iraq: In search of Resolution, http://www.dep.org.uk/ge/geedition.php?editionid＝29

14　世界中新聞記事の検索に http://www.transnational.org/new/TNN.html のサイトが紹介されている。

15　石川一喜「時事問題を教室で展開する方法とその意義?『グローバル・エクスプレスの分析より－』（日本国際理解教育学会『国際理解教育』第12号、2006年、62-71頁）が参考になる。

16　「シミュレーション・ゲームを取り入れた社会科授業開発」社会認識教育学会『社会認識教育構造改革－ニューパースペクティブにもとづく授業開発』明治図書、2006年、215-227頁。

17　本発表は科研費研究「時事的問題学習の単元開発に関する実践的研究－難民、平和・紛争、国際協力を中心に－」（研究代表者：藤原孝章、平成16-18年度）の一部をなすものである。